

## 『書と美』

野口林造（白汀）

今日は「書と美」という演題ですが大きすぎたかなと思ったんだけど根本的なことだからそれでいいかなと思います。

先ず今日は私の四十八才の時の映画をみていただきたいと思います。何故映すかといいますと、このねらいは書の美の二大特徴をみていただきたいからです。

一つに構成・構築があり、二つに線が生きているか、死んでいるか、リズムと躍動感。そのところを見ていただきたいと思います。これは五分の短い無声映画ですのでよろしくお願いいたします。私は髪が多く黒々して若かったですよ。皆さんみたいに勉強が大好きで真面目だったです。よく見てください。（拍手・上映）

本当に良く見ていただきましたが私もあいう時代があつてね、今思い出しました。記録っていうものはいいいもんですね。その時代、その時代、一所懸命やってますね。結果は別としても、その一所懸命さが後で役立つんだなと思いました。みなさんもこれから一所懸命勉強と書道をやってください。

それではここで本論に入ります。

「書」というものは難しいですね。見た通り色々あるんだけど、先ず「心」が大切です。書に心が入ってなかったら書じゃないですね。ただの記号です。心と精神が今見て分かったと思うんだけど、躍動感が一本の線の中にも相当ありましたね。楷書も草書そして隷書の中にあつたのがわかったと思います。ですから篆書でも行書でも、仮名の中にもあるのは当然です。躍動感がやっぱり書の中で一番の生命です。美しさの要素です。それはどんなかなと言いますと、その中に人間が入っているんです。愛情がなければ駄目ですね。お母さんですよ。愛って言うのは結果を求めないで尽くす。書も結果を求めないで、一所懸命やればいいんじゃないか。結果は後からついてきて、評価は皆がしてくれる。これは人生に似ているんじゃないかな。こういうふうに私は思います。そうすると書の中に品とか、香りとか、響き、そういうのが出てくれば良い書になるのかな。また力強いものも最近思っております。それが今の大宇宙の大きさを書いてあるじゃないかと私は思っております。

書と言うのは「線」で表現していますね。「絵」とどこが違うかというところ、絵も最初は線だった。ところがだんだん面になっちゃった。面も輪郭を引いてそれを塗りつぶした。昔の人の絵は書のような線がかいている。特に日本画の人物画見て御覧なさい。一本一本生きているすばらしい線ですよ。そういうことで、書と共通点があり生命感があると思います。そこでここに私の絵を持ってきました。これはですね、一本の線を引きながら、それで絵を描いたわけですね。一点は輪郭を書いてつぶしていった。書はこういうのを全部一切抜き出して線だけ。ここが書の魅力であり、すばらしさかな。こういうふうに思います。それからこっちの絵ですね。面だけで描いたんですね。ちょっと絵が下手だから色付けしましたけれども、これは線を主にして描いた絵です。こういうものを見ますと、書というのは、無駄っていうのを省いたものですよ。素晴らしいですね。省略の美だ。こういうところがまず言えます。

線を見てください。これが書の線に似ているんじゃないかな。これは全部旅行に行ったとき現地で描いた。下手ですけれども良く描けている。それはね、現地に行きますと、新しいもの、そこから新鮮な感動したものの、それがあるから私のような趣味で描いたものでも見られるんですね。ですから皆さんも是非、現地でスケッチをして感動してください。最初の感動を私は大事にしています。この感動は書の根本じゃないかと、こういうふうに思っております。

皆さんご存知の通り文字っていうのは、意思伝達が使命であったんだけれども、次第に美的表現するようになる。人間っていうのは生まれながらにして「美」を求めようというのがあるんですね。私、今日は少し良い洋服を着てきたんだよね。体を保護できれば、何でもいいですよ。だけど少しでも、演台に立って皆さんが不愉快な気持ちを受けない方がいいんじゃないか、というところでちょっとよいものを着てきた。この絵は「苺」ですね。墨色が美しいんですよ。周りの墨色でもってるようなもの。これは中国の古墨を使用したので淡くて感じのよい色が出た。中の朱の色もやはり古いよいものです。品が出たのはそのためです。良い墨は「澄んで冴えている」そういうことです。

またさっきは鉛筆で書いた線、今度は筆で書きました。線を見ていただきます。筆で書いたら温かみがありますね。躍動感もありますね。何か変化に富んでいますね。だから書は筆で書いた方がいいんじゃないかというのがこれで分かります。もう一点はベタツというように塗りつぶしちゃう。これは誰でも書けます。しかし一気に書かないと駄目ですね。あまり書きすぎると冴えが無くなり悪くなる。どこでやめられるか、これがポイントです。また、感動が薄くなるからです。有難うございました。良いものを映していただきました。

次に根本になる書の美について話します。書は美が根本的生命であることは間違いない。それが心と統一されなくては駄目なので、また対象の統一の原理が美に外ならない。その時に芸術性の書が可能になる。視覚表現と精神の美、これが統一すること

です。例えば良く混合調和されなくては駄目です。バラバラじゃ駄目。例えばここに「赤」があって「青」がある。赤と青を別々に描いたら模様になりますね。これはただのしま模様になる。ところが良く混ぜると「紫」になる。「黄色」があって「青」を混ぜると「緑」になる。青と赤が混合されて、紫になるんですけれども紫が単なる赤ではない。紫は単なる青でもないわけです。どういふふうに違うかというところ、やはりそこで初めて赤と青が混じって紫になる。書の場合でも「書きたいな」という精神があって、そこに筆があり硯があり墨があって、心と一致して書いた時「書」になる。だから素材はばらばらにあるんだけどもそれが統一され合体したときに初めて芸術となり、美が生まれる。だから紫を可能にする原理は赤でもなく、単に青でもない。実は紫自体である。芸術は単に寄せ集めではない。新たな原理、どうやって書こうかというその原理に基づいて統一され、また原理を凝縮して美となる、そして芸術になるのです。

画家がいる。書家もいます。一本の線を引く。画家の初めの一本、それから書家の初めの一本の線は違うんです。最初のうちは線で勝負だったけれど、いまの絵だと後で塗りこめる。修正が出来る。一方、一番美しい場所はどこだと思つけるわけです。だから絶え間無くデッサンしている。これ以上美しい所は無い所を求めている。書の場合は一本の線を引く時どんな字をどの場所に書こうかとする。その時一本一本皆違っても自由である。しかしその時の一瞬の決断で勝負する。決断してあえて一本の線を引く。その時迷いがあつたら負けである。書は一回性であるから、無限の可能性の中から、時刻も場所も一回切りで厳しい。最初の決断は相当の自信と勇気があるものでこれも書の特徴である。

この選択は公式というものが無い。これは書では「直感的決断」ということが出来る。これが良いか悪いかによって作者の力量が解る。

硯の上で筆に墨を付けている時から勝負は始まっている。だから直感的な決断っていうのは瞬時であるけれども前と後、奥行があるんですね。深さがある。この事は誰にも教えられないんですよ。いくら素晴らしい先生でも駄目ですよ。だから最後は自分との戦いですね。この一瞬は無数の可能性から一つの現実が生まれる。感動しますよね。真白い紙に真黒い墨、筆いっぱい付けた「ウワッ」という時感動です。雪が積もって真白に原野に何も通っていない所へ自分が第一歩を踏み入れた時、これは良いですね。感謝っていうか、贅沢でありがたい感動です。これが書の出発じゃあないかとかいうふうに思っています。だから私は可能性を信じたただひたすらに書く。結果的には二十枚も三十枚も書いちゃうんだけど一枚で書ければ一番いい。次に可能性があると思いだんだん書いていく。ところがだんだん悪くなるね。ああしよう。こうしようとする。結局一番始めが良かった場合もあります。しかし必死になって書いていたことが後で自分のためになっています。苦労した積み重ねが次の作品に必ずためになっているものです。

一方で初めの一枚というのは大事にしたいものです。欠点はあっても新鮮さがある。何か魅力があるんですね。「不完全の美」というものがあります。捨てないでください。

また、芸術は創造の直感ですね。天才的、独創的、その時は眠っていて、思ったんじゃ駄目。夢を見て、妄想じゃ駄目なんですね。そこには知性を内に潜んだものでなくては、ただぼやーっとして書いてちゃ駄目なんであって、芸術創造というのは書学の裏付けも大切です。文学や詩歌など学び、厚味ある直感的対決が出来るのです。文芸の場合でも美の中に自在な社会性も入って来ます。この総合が皆、書の美の中で生きてきます。美と芸術は色々のものよさが関連して生れて、どの分野からも美を吸収してしまうという勉強も必要です。

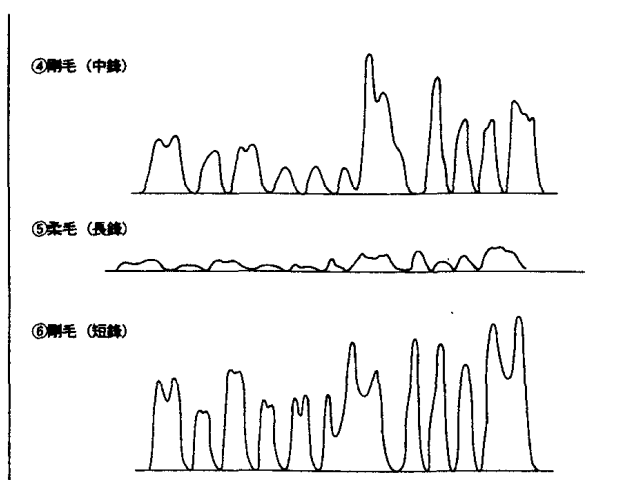
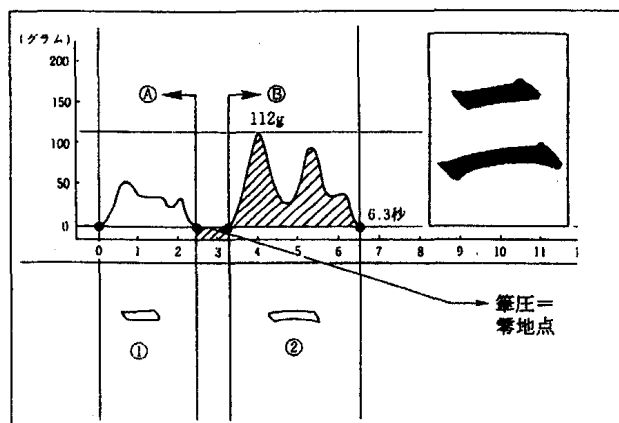
また心理現象や自然現象も美を創るまでの源になります。とにかく皆さん色々な物と美と結びつけながら、普段からどういう風に結びつくのかということの心がけをしていただきたいと思います。

そして芸術の根源を明らかにするためにどうしても、これらの美の本質を極めていただきたいと思います。

ここに一輪の花があります。二つのことが考えられます。直感と感情です、共に大事なんですけれども、先ず直感って言うのは人間の美的直感を理由無しに統合された直感です。考えるまでに統合される。そういうものですね。感情はその人の性格とか、今までの体験、今日の環境など、色々なもので感性は生れてくるんですけれども、直感と感情は違う。今ここに花があって「この花はあじさいである」と言った場合には私的体験ですね。学問的の何科の花、文学的あじさいか解らない。これは私的体験が必要であるわけです。直感とは違います。それからあじさいという不変的な概念で媒介されて人間と花とが対峙したことになるわけ。直感で認識されたのです。何も考えないで直感で認識する。この認識のし方には重要な課題が含まれています。この花が「いいな」と思えばこれは美的直感です。誰もこれはもっている。しかし、感度の良い人と良くない人はあります。書道を作る人には美的直感の感度の良い人になって頂きたいというのが大事なのです。書作の場合、間を置いてから一行目は二行目はこう書こうといているのでは間に会いません。一瞬にして感じなければなりません。だから、感度の悪い人は勉強して、感度が良くなるように磨きます。これは古典の勉強であり、よく本を読みよい話をよく聞き、よい自然にふれるということです。その他いろいろなものの勉強から、その美的直感の素晴らしさを学ぶことです。美的直感の磨けば感度は誰でも良くなります。また感情という体制があります。客観的に維持するんじゃない。自分自身を意識する。だから「この花は美しい」と言われた時に意識するのは自分自身です。だから一人一人全部違う。あなたは良く感じたけど、次の人は感じない、これはそれぞれ皆違っています。けれど良いものは良いと感じられる人になりたい。いいなあと感じられる人って言うのは裏を返せば、相手も綺麗だし、環境も良いです。条件が整ってんだけど、本当の奥はあなたの心が美しい。自分の心が美しいから美しいと感じるのです。



「二」の波形グラフ



のは位置を示すだけで「無」から有の瞬間、それが点です。点は位置であるが大きさではない。それを書道では点は面積があるが点といっている。線にもほんとは幅ないわけ。ましては痩せてるとか、太っているとか、こうものは線でない面である。それにもかかわらず我々は線と言う。どうして線と言うかという、その中に運動がある。リズムがある。生きていることが線で棒とは違う躍動感があるので書の線という。

「二」というところを見ていただきます。これを見て解かるとおり「二」という字を書いた場合、我々は普通、平面上からしか見ていない。書いた線を断面から見よう。断面から見るといふのはどういふことかと言うと、書くときに「筆圧」が必要だということ。線は筆圧が強いところ、弱いところもある立体である。時間がかかるのと、かからないところもある四次元の世界です。それを前図に示した。二本の「二」の一本目が左側の白山です。二本目の線が右の山です。それでこれを見た場合に、力が違う。筆圧が違う。こういうふうにした場合、断面にグラフに表わせる。だから一定の力、一定の速度じゃない。山の幅が違う。高さが違う。それが解るじゃないかと思えます。そこで肝心なことが一つあります。これはAとBに矢印の真中にゼロ地点がある。ここが大事です。ここを広く取るか、小さく取るか、短く取るかによって書が変わる。これを虚画、ここを「空間曲線」と私はあえて言っています。だから「空間曲線」の長さによって文字が違ってくるということここで私は発見しました。これを見つけたのは十年位前で日本で始めて「筆圧筆速測定機」というのを、はかり会社の協力で造っていただいたからです。書は筆圧・筆速・リズム・時間があるということを具体的に示したのがこの研究からでした。

こんどはこの機械を使い道具を変えたら変わってくるんです。羊毫で書いた筆圧、剛毫で中鋒、剛毫で短鋒、そして柔毫で長鋒で書くとこんなに激しい差があることが解ります。次に手すきの半紙、機械すきの半紙を同じ筆で書いてみる。これらはまたそれぞれの特徴がはっきり表われました。特に筆が柔毫ですとグラフは穏やか。筆が剛毫はグラフが激しいことが目で見ること

が出来ました。また直線と曲線には、速度を変えるとこのようになることさまざまな実験をしました。これにより書作の表現方法の参考に大いなることも解明できました。例えば柔らかい筆は、同じ力で書いてもどこかに力が隠れているからじっと見ると深みが増し、剛毫で書くと強い表現にむくことなど次々に図で解明できました。

また、書は書き直しがきかないところ、後戻りの出来ない、音楽性、舞踏性、神聖さなど人生と同じようにも思えてなりません。

次は余白です。書は余白美が大変重要な美の特徴です。「一」を書けば余白は二つ。「人」を書けば三つ。十を書けば四つ余白が出来ます。書くということは裏を返せば余白を作っていることなんです。その白は生きていれば余白、死んでる白はただの空間です。

今日皆さんは今朝早く起きて、私の講演会に時間を使って来てくださいました。しかし何かためになること一つでも聞ければこの時間は余白です。しかし何も得るところなければ空白だったのです。

我々は字を書いているんですけども、余白の美しい作品は大概良いものです。その知性と感性も解ります。

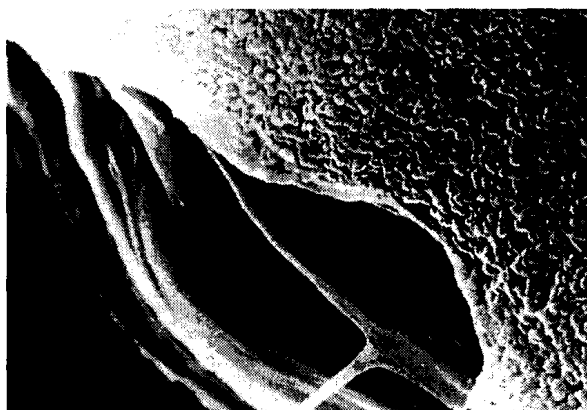
余白を具体的に見てみます。蘭亭叙の実線と余白の図を出して見ました。余白が実線より如何多いかが解ります。仮名になると九対一位の割合いで、余白が驚くほど多いものです。この黒と白の対比を美しく表現するのが書のポイントです。

次は墨色美の秘密です。墨は膠と媒煙。それから水と香料から成り、これが一つになって固まって墨の状態になります。

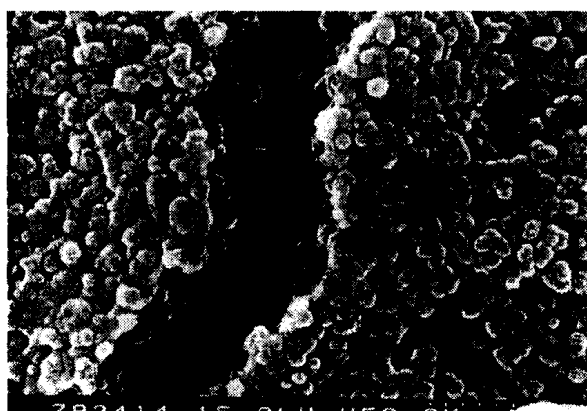
#### 蘭亭叙・張金界奴本（部分・縮小）



上部は右の文字の部分を切って詰めて貼ったもの。黒の部分が余白



墨の付いた部分と墨の付いていない紙の繊維



紙の上に書かれた墨の状態(黒いところは渴筆)

が厚く紙の上に乗っている。この状態のとき上から見ました。この墨の粒子が細かくて、つもり方し込み方が多ければ多いほど濃く見える。黒く見える。このつもり方がバラバラになっている時は薄い。だから薄く見える。つまり濃く見えるというのは墨の一粒一粒が多いか少ないかということ。淡墨の場合は黒の粒子が少なくなっている。粒子が無くなったとき白く見える。またこの時渴筆の場もあります。書線をコックリ表現したい時は厚い紙で、薄くにじませない時は薄い紙が合っています。

ここで電子顕微鏡で見ますと図のようにゴチャゴチャと紙の繊維がからまっています。ここらに墨が滲み込みまたは付着するのです。

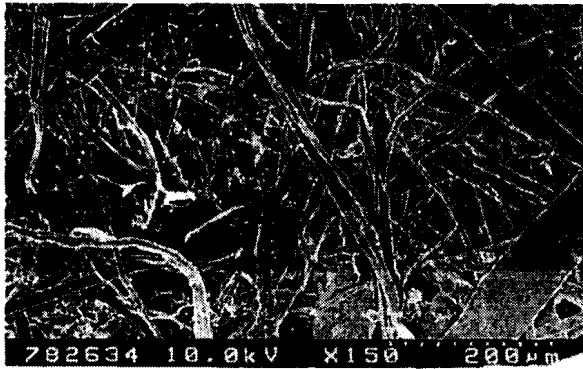
以上のことが書と墨、紙との関係になります。同じ線と同じ墨で書いても色が違うのは墨の量、筆圧の関係にもよります。力を入れれば墨色は悪くなり、入れないで書けば同じ人が同じ紙に書いても良い色が出ます。また小さい紙ですと淡墨の場合よい色が出、墨量を多く大きな紙に筆圧を強くかけて書くと墨色は濁ります。この基本を心得ておきますと優しく美しい墨色が出ます。滲みは先に申した通り墨の粒子が外に自然に広がるようにすればよい滲み方をします。それには墨を丁寧に磨り、薄い紙の繊維の細かいものを使います。

また墨を磨って時間が経過しますと、宿墨になり墨色は重く濁ってきます。この欠点がありますが、これを上手に使うと一味違った作品になって面白いものが出来ます。これは水と蛋白質と菌との関係があります。

今カーテンを全部閉めました。暗くなりましたね。こ

れで電気を消せばもっと見えなくなる。何も見えなくなる。見えるということは光があるから。一番光を強くあてて、ギラキラした場合は鏡。次は白です。光が全部吸収されたとき、黒のわけです。だから、ものが見えるということは光の当たり方と影光の量、光の吸収力、いろいろな光の反射や吸収によって色が見え変わるわけです。だから見えることは光があるからで、絵画の場合、黒は無色彩。ところが書の場合は墨色と白色と敢えて言っているわけです。それでは、濃墨とはどういうものか。光をたくさん吸収しこれ以上墨が濃くならないとき、墨の炭素粒子に密度がある。厚みがある。墨で書いたとき墨





密度の低い紙とその墨色 (左)

水はブラウン現象があります。これはブラウンという学者が発見しました。水はブラウン現象でよく動いて、墨の粒子を動かします。しかし宿墨になるとコロイド状の墨がだんだん大きくなり、水のブラウン現象でも動かなくなり、やがて器の底へと沈んでゆき固ります。そこではその墨を使って書くと重く伸びなくなり、線の牙えがなくなる欠点があります。そしてコロイド状になった蛋白質に菌が付き増えます。墨そのものには菌はつきませんが、膠が蛋白質なのでそれにつくんです。腐った墨の匂いをかぐと臭い。宿墨は菌が三日位で何億匹になってしまふ。匂いも悪く、墨の色も悪くなる。しかしながらある一定の時期を過ぎますと菌が蛋白質を食い尽し、しまいには菌の共食いになり、食べるものがなくなって最後にはその菌も死ぬ。そして何年か置くと匂いが無くなる。この原理を応用したのがうなぎ屋のたれ、表装士の糊です。この柔らかい糊で薄い紙で何枚も裏付けするので表装がやわらかい。厚い紙で一枚機械で裏打ちした表装はバリバリです。

またよい墨で淡墨にすると、二百倍も伸びます。これは墨色は二百色以上もあることになります。墨は伸ばしてみると墨の良否がはっきり解ります。この時の墨の色は明るく澄んでいます。

ここで私は提案したいことがあります。絵の色は世界共通色が番号で表示されている。書の場合はありません。この辺で世界に通じる墨色環をみんな考えて造ることはどうでしょう。私は実験的に十二色、二十四色を番号をつけて、濃から淡を試作しました。仲々面白いものです。学校教育、書の製作時の墨色美に役立つと思います。

今日のまとめとして書作の「カキケケコ」だなど思います。㊦感動です。自然からの感動でも良い。古典からの感動、本や話しからの感動でもよいと思います。書作には先ず感動が大切です。次は㊧緊張感が無ければ駄目なんじゃあないかな。短い時間での集中力。書は緊張感の勝負です。集中力があると大きな力が出来ます。しかし緊張だけでは疲れますので㊦くつろぎです。旅行したり、よい友達と話し合ったり、自分の趣味を生かすことも欲しいものです。次は良いと思ったら㊦「決断」これは自信の賜物です。よく勉強していると出来ます。間違わない決断が出る。最後は㊦「好奇心」。今までやらなかったものをやってみる。反対をしてみよう。新しいものへの挑戦、これが必要だと思います。未知の世界への挑戦と開拓心、これが書を向上させる原動力ではないでしょうか。

芸術家、哲学者西田幾太郎が言っています。書とはすばらしい、神秘的で奥が深い。その究極。『書は凝結する音楽といふべきものである』。凝結する音楽。心に響きますね。こういうふうになりたいものです。一生に一点永久に消えることのない作品を書きたいですね。

以上で今日の講演会を終わらせていただきたく思います。  
御清聴ありがとうございました。